

## 大川屋書店版『里見八犬傳』続攷―九臯館本との比較を通して―

山本 貴 恵

### 一、はじめに

大川屋書店版の『里見八犬傳』については、拙論「資料紹介」大川屋書店版『里見八犬傳』<sup>①</sup>及び、「資料紹介」袖珍本『南里見八犬傳』略解題<sup>②</sup>で紹介してきた。その後の調査で、この二点の資料と同じ本文を持つ資料を新に入手した。そこで、改めて新出資料を踏まえつつ、考察を試みたい。

大川屋書店については、拙論「資料紹介」袖珍本『南里見八犬傳』略解題<sup>③</sup>や、「布川文庫『蹴出版圖書目録』―八犬伝」受容の側面から<sup>④</sup>で述べた。確認のため、再度の説明をしておきたい。大川屋書店に関する先行研究としては、拙論の他、吉沢英明「『講談資料』―尋ね求めて三〇年<sup>⑤</sup>」や、小田光雄「講談本と近世出版流通システム<sup>⑥</sup>」に詳しい。「八犬伝」受容史研究を行う上で、大川屋書店の『八犬伝』を研究するその意義は大きいといえる。なぜなら、明治期において大川屋書店の果たしたその役割は非常に大き

かったからである。

八木敏夫編『全国出版物卸商業協同組合三十年の歩み』の中で、当時の大川屋書店について説明をしている「大川屋の活躍」と題する一ページがある<sup>⑦</sup>。それによると、初代大川錠吉は深川で貸本屋を営んだ後、一八七〇（明治三）年に浅草前にて出版業を開業。その後、「たまたま講談の活字化を計ったのが因に当たり、続々と講談本の出版を行った」ことにより、「二世を風び<sup>⑧</sup>した菊判講談本時代の実現」をしたという。

二代目錠吉が婿入りした際には、「大川屋にはすでに七、八百種の出版物があ」り、「当時卸店はもちろん、露天商、高町商人、各地の小売書店では、大川屋の出版物を扱わないと商売にならないといわれたくらい」であった由。大川屋は「信玄袋に見本を入れて、九州から北海道まで書店回りを行った」というから、全国津々浦々まで広く出回っていたと考えられる。しかし、これほどの隆盛を誇った大川屋書店であるが、今現在、その存在は注目されることなく、すっかり忘れ去られてしまっているようである。

拙論「資料紹介」大川屋書店版『里見八犬傳』略解題<sup>(8)</sup>で紹介した資料は、ここで言う「一世を風び<sup>(9)</sup>した菊判講談本」である。その本の奥書を見ると、一八九三(明治二六)年初版発行であるが、一九〇三(明治三六)年の時点で十版を発行しており、継続的に版を重ねていた様子が見受けられる。そして貸本屋の所蔵本であった形跡があった。

次の拙論「資料紹介」袖珍本『南里見八犬傳』略解題<sup>(9)</sup>の中で紹介した袖珍本は、その貸本屋所蔵の菊判本の後印本であり、後に一世を風靡した立川文庫に先駆けて出された、「大川文庫」である。その二点の資料についての比較考察は、この拙論で試みた所である。

以上を要するに、両者を通して同じ本文を持つ作品が、一八九三(明治二六)年初版発行から一九一一(明治四四)年発行以降まで、明治の二十年間を通して多数発行され続けたわけである。両者はより多くの大衆を感化したであろう本の一つであったといえることは既に指摘した<sup>(10)</sup>。

このように広く大衆に親しまれた資料を研究することは、「八犬伝」受容史のみならず、近世文学の享受史、ひいては明治期における出版文化研究に資するであろうことは疑いない。しかし現在、これほどまでに隆盛を誇った大川屋書店が忘れ去られてしまっている要因の一つとして、資料が散逸してしまっていることが大きい。

三点目の拙論である「布川文庫『蹴出版圖書目録』―「八犬伝」受容の側面から―<sup>(11)</sup>」では、当時の大川屋書店の出版物の全体像及び大川屋の実情を論じた現存する唯一の貴重な資料である『蹴出版圖書目録』の紹介、考察を行った。その中で「八犬伝」受容史からの側面というところで、現在残されている何点かの資料との比較を通して、大川屋の「八犬伝」に焦点を当てて考察してきた。それによって、明治期を通して、「八犬伝」は依然として人気であったといえることを確認することができた<sup>(12)</sup>。

これまでも述べてきたように、大川屋書店版『里見八犬傳』は非常に貴重な資料であるといえる。その上で、新に入手した資料を含めて大川屋書店の『里見八犬傳』を再度、考察してみたい。

## 二、大川屋書店版『里見八犬傳』

これまで拙論にて紹介してきた、二点の資料について再度紹介する。まず、大川屋書店版『里見八犬傳』の書誌について、略述すると、一八九三(明治二六)年十月に発行、手元にあるのは一九〇三(明治三六)年九月発行の十版である。縦21・9センチ、横14・1センチ。頁数三六六頁(本文のみ)のダイジェスト版である。本文は句読点がなく、段落の変わり目に大きな○が付されている。こ

らは貸本屋所蔵とみられる文言が付されてあった<sup>15)</sup>。

次に、後印本である袖珍本『里見八犬傳』は一九一一（明治四四）年発行の初版本。書誌を略述すると、縦12・8センチ、横9・5センチ。最終ノンブルは三四〇である（ただし、ノンブルは「九」より始まる）。本文の一頁前に口絵が一枚あるのみで、挿絵は存しない。苔色のクロス装丁。巻末広告を見ると、ポケット形と書かれている。見返しには、図案と共に「文庫」、「曲亭」、「馬琴」の印字が散見される。

以上の二点の大川屋書店は、「資料紹介」袖珍本『南里見八犬傳』略解題」で、「粗筋が簡潔に分かりやすくまとめられていることや、原文の語を効果的にしようしていることなどから作者は原本を読んでいた、もしくは原本に準じたテキストを実際に読んでいたと考えられる。」<sup>15)</sup>述べた。

この二点の大川屋書店版『里見八犬傳』は、一章で前述のごとく、『全国出版物卸商業協同組合三十年の歩み』によると、「一世を風び（ママ）した菊判講談本」と、一世を風靡した立川文庫の前に出された「文庫本時代を先駆けるシリーズ」である「大川文庫」である<sup>15)</sup>。二点の比較については、既に「資料紹介」袖珍本『南里見八犬傳』略解題」にて、菊判講談本をA本、袖珍本をB本とし、詳しく考察を行った<sup>16)</sup>。

新出の資料を併せて、再度考察を行ってみたい。まず、二点の資料を比較すると、どちらも一世を風靡した、一時代を築いた資料であるという点については同じである。さらに、同じく大川屋書店発行の出版物であるということと、構成面からいっても、形態が違っただけで、序、本文そのものは同じである。菊判本と袖珍本における相違点としては、印刷所が大川屋印刷所から邦文社に変わったこと、それに伴い、印刷者も変わっている。

また、文庫化際し、版型が小型化され、糸綴じの和装本から洋装本へと形態が変更された。それに伴うように、第一回のみであった章立てが、第九回までとなり、文章に句読点も付され、整備された。本文中の挿絵見開き十二面も全て削除されている。

しかし、印刷所の他、形態面のそれ以外に大幅な変更点はない。表紙が異なるが、これまで前述のごとく、菊判本（A本）は後に貸本屋によって改装されたものと考えられ、本文と本文中挿絵は料紙が違ふことから、序の間の見開き図版十一面も、恐らく、表紙と共に後から挿入されたものと考えられることを述べた<sup>17)</sup>。

【表一】菊判本と袖珍本

呼称	大川屋 A 本	大川屋 B 本
発行年	1893(明治 26).10【初版】／1903(明治 36).9 【10 版】	1911(明治 44).8
書型 (縦×横)	21・9×14・1cm	12・8×9・5cm
版型	菊判版	袖珍版
装丁	和装 (改装本)	洋装
頁数	366 (9 頁から始まる)	340
1 頁あたり	約 28 字×14 行	約 35×12 行
級数	18・5Q	14Q
章立て	第 1 回のみ	第 9 回
本文	句読点なし。大きな○あり。	句読点あり。
金額	未記載	25 銭
印刷者	小宮定吉	牛坂三郎
印刷所	大川屋印刷所	邦文社
挿絵	本文中挿絵見開き図版 12 面／(※本文冒頭、序の間に見開き図版 11 面あり)	口絵 1 枚

### 三、九阜館版『里見八犬傳』

冒頭でも述べた通り、この二点の大川屋書店版『里見八犬傳』と同じ本文を持つ資料を入手した。九阜館発行の『里見八犬傳』である。九阜館版『里見八犬傳』は、架蔵本と国会図書館本〔特 13・256〕の二点があり、架蔵本は後に洋装本に改装されている。国会図書館本は、当初のそのままの原型を保っている。国会図書館本の書誌は、縦 19・4 センチ、横 12・3 センチ。架蔵本と国会図書館本のどちらも「明治廿六年十月二十日印刷、十月廿四日発行」の初版発行の同本である（なぜか、国会図書館本には、後に黒ペンで「二十」の後に、「二」と書き足されている）。総頁数三六六頁（ノンブルによる。ただし、ノンブルは「九」より始まる）。

書題は、前表紙は『南総里見八犬傳』とあり、その他の題は、「八犬士傳序」（序題）、「里見八犬傳」（端作題・尾題、奥付題）とある。綴じ穴は三つ。前表紙は光沢のある苗色の薄紙で、多色刷りの石版印刷。ゝ大法師と幼い八犬士たちの絵が描かれている。国会図書館本の後表紙は欠。後に洋装本に改装されている架蔵本の表紙と国会図書館本の表紙の絵が同じであることから、架蔵本は原装の薄い前表紙をそのまま厚表紙に貼付けていることが確認される。

国会図書館本は、原本を実際に見てみると、原型を保っているが、僅かに糸が残っているのみで、綴じは外れてしまっている。本紙の紙も粗雑であり、劣化しているため、保存容器に入れられていることで、何とかその原型を保っている状態であり、後表紙もない。



【図版一】九阜館版『里見八犬傳』前表紙（国会図書館蔵本）

架蔵本は後に改装されてしまっているものの、厚表紙の洋装本に改装されているために、綺麗な状態を保っている。本体の内側を見てみると、綴じ穴は三つ（【図版四】参照）。  
 書誌を示せば、縦18・4センチ、横12・4センチ。洋装本に改装されているため、焦茶色のクロス装丁。背に金字で『南総里見八犬傳』とある。後表紙は、薄い緑色の光沢のない薄紙が厚表紙に貼付けられている。両者の図版を載せると、次の通り。

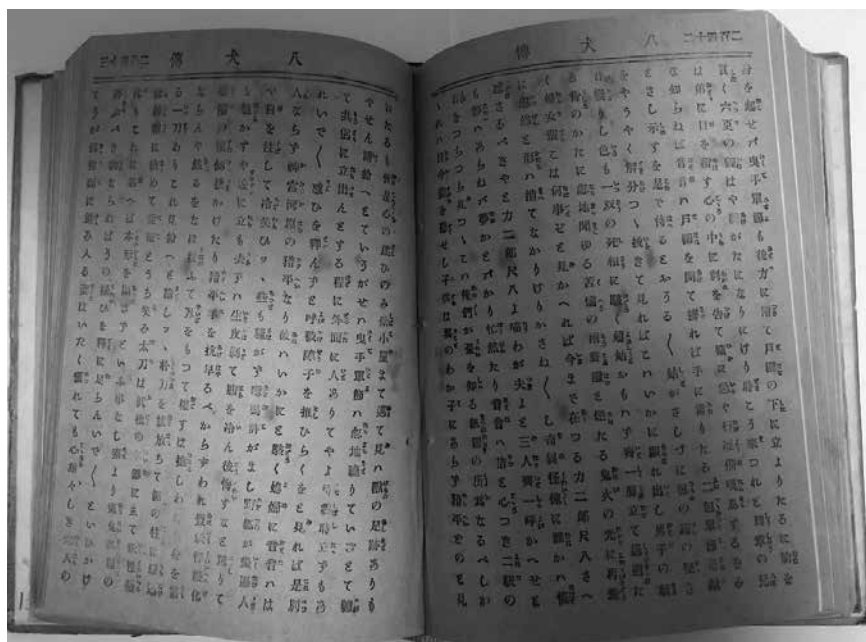


【図版三】九阜館版『里見八犬傳』後表紙（架蔵本）



【図版二】九阜館版『里見八犬傳』前表紙（架蔵本）

【図版四】九阜館版『里見八犬傳』の綴じ穴（架蔵本）



尚、国会図書館本は、著作権切れにより、インターネットで一般公開されている（マイクロフィルム版）<sup>18)</sup>。

また、この国会図書館蔵本の「八犬士傳序」には、東京図書館蔵印の他、二重丸の印で内枠の中に「圖」、外枠の中に「明治二六・一〇・二六・内交」の印が押されており、内務省交付本であることが伺える。内務省交付本については、岡田温「旧上野図書館の収集方針とその蔵書」<sup>19)</sup>に詳しく書かれている。

それによれば、一八七五（明治八）年の納本制度以降、「初め新刊出版物は文部省准刻課に納入され、その納入新刊本は東京書籍館に廻付、ここで利用並びに保存の途が講ぜられていた。」<sup>20)</sup>といい、同年、准刻課が文部省から内務省へ移った後も、「内務省へ納入された新刊図書中、一部を東京書籍館に交付して、従来通り一般の利用に供せられることになった。」<sup>21)</sup>という。そして、「この方法は、東京書籍館が東京図書館となり、帝国図書館となり、更に国立図書館となり、又納本を規定する法律にも若干の変更が加えられながらも、終戦により内務省が廃止されるまで続いた」<sup>22)</sup>そうである。

桜井保之助「我國の納本制度について―その史的デッサンと問題の解説―」には納本制度について時代ごとに詳細に述べられているが、一八九三（明治二六）年四月には「法律第15号で、「出版法」が新しく制定され」、「3部納本の規定だったものが、これにより2部に改められている。」<sup>23)</sup>という。

つまり、この本は「明治廿六年十月廿四日」に発行後、書店（九阜館）から二部、内務省へ納入されたもの一部として、東京図書

館に「明治二六年十月二六日」に交付されたものである。書店から納入されたものであるため、架蔵本のように途中で改装されることなく、原装のまま残されているのであろう。

#### 四、大川屋本と九阜館本

次に、同じ本文を持つ二点の大川屋本と九阜館本とを比較してみたい。大川屋A、B本及び九阜館本の大きさの比較を表したものが【図版五】である。左から順に、大川屋B本、九阜館本、大川屋A本と大きくなる様を並べて示した。

そして、先ほどの【表一】に、九阜館本を新たに追加すると、下段の【表二】のようになる。



大川屋A本（菊判版）  
 <  
 九阜館本（四六版）  
 <  
 大川屋B本（袖珍版）

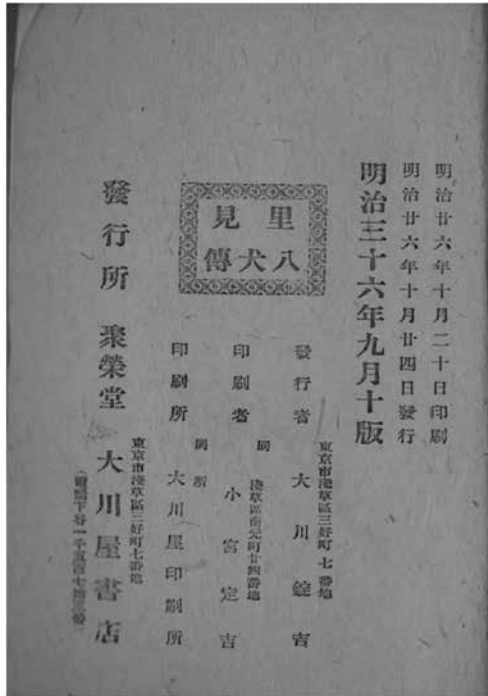
【図版五】大川屋版三種の大きさの比較（架蔵本）

【表二】九阜館本と大川屋本

呼称	九阜館本	大川屋A本	大川屋B本
発行年	1893(明治 26).10.20 印刷、 10.24 発行	1893(明治 26).10.20 印刷、 10.24 発行【初版】／1903(明 治 36).9 【10 版】	1911(明治 44).8.5 印刷、8.10 発行
書型（縦×横）	19・4×12・3cm（国会本）	21・9×14・1cm	12・8×9・5cm
版型	四六版	菊判版	袖珍版
装丁	和装	和装（改装本）	洋装
頁数	366（9頁から始まる）	366（9頁から始まる）	340
1頁あたり	約28字×14行	約28字×14行	約35×12行
級数	18・5Q	18・5Q	14Q
章立て	第1回のみ	第1回のみ	第9回
本文	句読点なし。大きな○あり。	句読点なし。大きな○あり。	句読点あり。
金額	未記載	未記載	25 銭
印刷者	小宮定吉	小宮定吉	牛坂三郎
印刷所	九阜館活版所	大川屋印刷所	邦文社
挿絵	本文中挿絵見開き図版12面 ／（※本文冒頭、序の間に 見開き図版11面あり）	本文中挿絵見開き図版12面 ／（※本文冒頭、序の間に見 開き図版11面あり）	口絵1枚

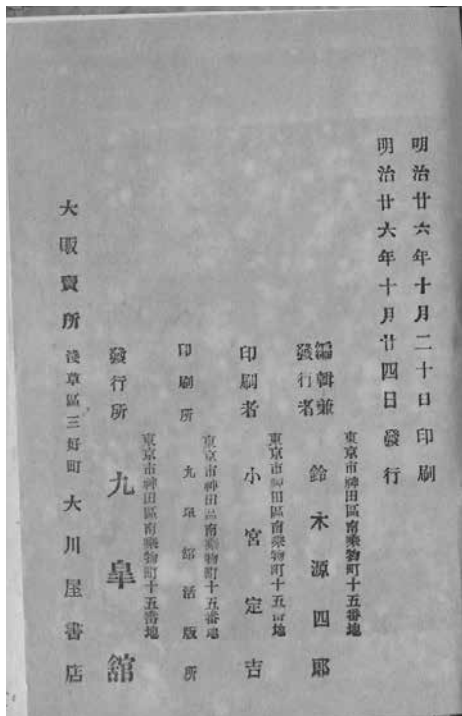
すると、大川屋の菊判A本と九臯館本がほぼ同じであることが分かる。大川屋菊判A本の方が九臯館本より、大きさが一回り大きくなっており形態が違うことと、発行所は異なるものの、大半はほぼ同じである。発行年、装丁、九頁から始まる頁数、一頁あたりの字数、行数、文字の級数、本文、挿絵の他、印刷者まで同じである。さらに、ここで両者の奥付を見てみたい。それぞれの奥付を提示すると、次の通りである。

【図版六】大川屋版A本『里見八犬傳』奥付（架蔵本）



先にも述べた通り、大川屋A本は「明治廿六年十月二十日印刷／明治廿六年十月廿四日發行／明治三十六年九月十版」発行の十版である。発行所は聚榮堂大川屋書店で発行者は大川錠吉、印刷所は大川屋印刷所、印刷者は小宮定吉である。次に、九臯館本の奥付を見てみると、大川屋A本の初版の発行日と同じであることが分かる。九臯館本は「明治廿六年十月二十日印刷／明治廿六年十月廿四日發行」の初版本。発行所は九臯館、「編輯兼發行者 鈴木源四郎」、印刷所は九臯館活版所、印刷者は小宮定吉とある。

【図版七】九臯館版『里見八犬傳』奥付（架蔵本）





さらに、最後に「大販賣所 淺草區三好町 大川屋書店」とある。つまり、九阜館發行本であるが、大川屋書店が大販賣所となり、広く販売していたことが分かる。

以前に拙論「布川文庫『出版圖書目録』——「八犬伝」受容の側面から——」<sup>(23)</sup>において、大川屋出版圖書目録について紹介した。その中で「御註文規定」の最初の項目である「要旨」には、「本書目記載の分は單に弊店出版物のみにて尚他書籍類御入用の節は多少を論ぜず手廣く取次販賣仕候に付見積にて前金相添へ御註文次第可應貴需候」とあり、実際に、大川屋が取次業を行っていることが確認できることを述べた<sup>(24)</sup>。

この九阜館版『里見八犬傳』も、大川屋が取次を行っていた本の一つであったのだろう。「編輯兼發行者 鈴木源四郎」と九阜館本には書かれているが、大川屋A本の方には、「發行者 大川錠吉」と發行者しか書かれていない。

一方、大川屋A本の方を見ると、發行所、發行者、印刷所が全て大川屋に変更されており、初版の印刷、發行日の後に、「明治三十六年九月十版」と大きな太字で追記されているのみである。これらのことから、後に大川屋に出版権が移ったと考える他ない。

【資料紹介】袖珍本『南里見八犬傳』略解題<sup>(25)</sup>でも引用したが、吉沢英明は大川屋書店の袖珍本と菊判本について、「講談資料」——尋ね求めて三〇年<sup>(26)</sup>」の中で次のように述べている。大川文庫については、「立川文庫同様クローズ装丁で發行ごとに色を異にし」、「内容は既刊の菊判本を叢書に再編したり、上方の書き講談の版權

を譲受したり」したという<sup>(27)</sup>。そして、既刊の大川屋本については「新聞・雑誌連載から単行本化される例が多くそれを集大成したのがわが大川屋である」とし、「速記本は版權が二転、三転し最終的には一八九七（明治三〇）年代と一九一六、一九一七（大正五、六）年前後のいわゆる大川屋本で終る」という<sup>(28)</sup>。既刊の大川屋本の特色については「菊判で紙装、本文は粗紙で二〇〇頁程度、派手な石版表紙、貸本屋の印が散見する」といい、その原本については、「よく市場に出没する博文館の長編講談は速記本ではなく編集者が手を入れたもの、原本たる新聞附録等と比較すれば一目瞭然だそうで、「講談社の一連の全集類も同様」であるという<sup>(29)</sup>。

ここでいう、大川文庫はB本のことであり、既刊の大川屋本はA本でのことであろう。そして、大川屋本になるまでに版權が度々変わっていることを指摘している。九阜館本は、最終的に大川屋本になる前の段階の資料であるといえる。元々取り次いでいた資料であり、出版権が移った後は、版型を変更したのみで、本文はほぼそのまま使用したと考えられる。

大川屋本にはないが、九阜館本の方には、「編輯兼發行者 鈴木源四郎」とある。九阜館本『里見八犬傳』も講談速記本ではない書き講談であることから、博文館、講談社同様、恐らく九阜館も「新聞附録等」、もしくは「新聞・雑誌連載」を元に、編集者である鈴木源四郎が書き直したものであろうと考えられる。その際に、各回が抜け落ちてしまい、第一回のみとなってしまうたのである。

邑井吉瓶講演『松山麒麟一声』【特9・310】（国会図書館所蔵本）

の上編「叙」の初めの一文に、「新聞抜萃の講談は一時の高評を博するも再度のきゝめは薄し」とある（著作権切れの為、インターネットで一般公開されている<sup>(30)</sup>）。もちろん、この本は講談速記本であるため、邑井吉瓶の講談を「速記なさしめて軽便なる書冊」としたこと、「原書に依りて其の實際を知り以て」書かれたものだという経緯が「叙」で述べられている。

【図版八】『松山麒麟一声』上編（国会図書館所蔵本、マイクロフィルム版）

新聞抜萃の講談は一時の高評を博するも再度のきゝめは薄し  
 古來買込みたるものは何處に聞かぬを來さずと其講談  
 師へ云へり實に理なり或劇場にて世界入りする時は忠  
 實を演ずれば何處で演ても入りぬ事ありあらず講談  
 師が腕もの支ゆれば太閤記のびらを奪て下足のを穿すと  
 聞けり之れ世に面白き評判を博したるが故なりされは何事も  
 人の喜ぶものを出ださざるは不利益なりと敢て算定より  
 割出せしよはあらねむ書肆が此度松山事件を出版する敢て利  
 益を計るの一点もあらずして邑井吉瓶子が得意の講談長さが  
 故に全新聞を得ざるの憾あれば之を速記なさしめて軽便な  
 る書冊として讀者の便に供するもの老實心のみ、遠慮も解れ

この冒頭の一文は、吉沢英明が述べている通り、「新聞・雑誌連載」や「新聞附録等」を元にして、それを単行本化したものが多かったことを意味しているとも捉えられる。ここまでを整理すると、次のようである。

祖本  
 ↓ 九阜館が新たに編集  
 ↓ 大川屋  
 （新聞・雑誌連載、新聞附録等か） ※併せて、二、三回の版權譲渡

また、浅岡邦雄は「明治期貸本貸出帳のなかの読者たち―鳥山町越雲巳之次『貸本人名帳』をめぐる―」<sup>(31)</sup>の中で、一八九七（明治三十）年代から貸本業を開始した当時の栃木県烏山町の越雲書店の貸本台帳を考察している。その中で、貸本の内訳が、講談速記本と探偵小説で「九〇%を越えていて、貸出本の中核であることが分かる」こと、その他、特定できない資料も「その書名から講談速記本と思われるものが多く含まれていることから、貸本として稼働したものの大半は講談速記本であったといつてよい（おそらく全体の七割を越えよう）」と述べている<sup>(32)</sup>。

さらに、それらの講談速記本の仕入先について、「とりわけ大川屋発行のものが多数を占めていて、越雲書店の仕入れが大川屋刊行物を中心におこなわれていたことを窺わせる」とし、大川屋書店について次のように説明している<sup>(33)</sup>。

…講談速記本は版權の譲り受けがしばしばおこなわれ、大川屋が他社の版權を買い取って多くの速記本を出版したことはよく知られており、そうした大川屋の出版物は所謂「赤本」と称されて、全国の貸本屋に出回っていたのである。そして、講談速記を一手に引き受けたかのように活躍したのが今村次郎である。

貸本として読まれた講談速記本（特に東京刊行）の多くは今村次郎の手掛けた速記によるものであった。

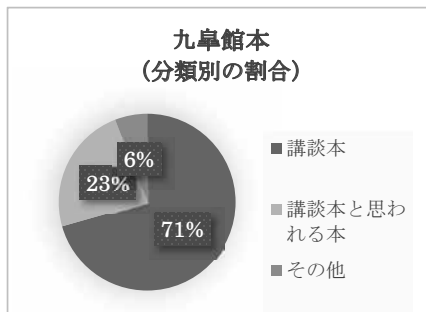
つまり、この九阜館本も、そういった大川屋に版權を買い取られた多くの書物の中の一つであったといえる。さらなる手掛かりを探すため、九阜館がどのような出版社であったか、国会図書館所蔵本から調査、考察してみたい。

国会図書館所蔵の九阜館発行本は全部で三四作品。一八七三（明治六）～一八九七（明治三十）年までの間に発行されており、そのうち、一八九三（明治二六）～一八九四（二七）年に発行されているものが大半である。架蔵本『里見八犬傳』を出版した時は、活況を呈していたのだろう。

タイトルを見ると、「講談百種」、「歴史講談」等、講談と名の付く作品が多い。国会図書館にあるのは、「講談百種」第一冊～二十一冊目までである。講談と名の付いていない本でも内容を見ると、今村次郎速記本など、講談本である本が多く、いずれもそのほとんどが講談本であることが伺える。講談本と思われる本も含めると、講談本が全三四冊中三二冊、九四％と大半を占めている。

【表三】九阜館本の内訳（国会図書館所蔵）

全32タイトル34冊



分類の方法

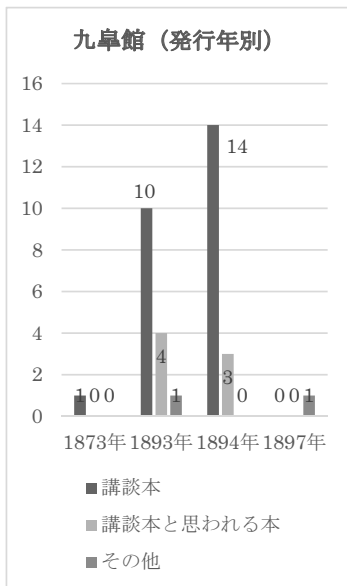
一、講談本（講談と名の付く本、速記者が記載されている本）

23タイトル25冊

二、一のように記載はないが、講談本と思われるもの 8冊

三、その他 2冊

※講談本と思われる本のうちの1点、落語本と思われる本を含める。



関根黙庵は『講談落語今昔譚』で、明治の講談、落語について次のように語っている<sup>34)</sup>。

…江戸趣味の横溢せる高潮の時代は何といっても明治の初めから二十年頃までが最も旺盛を極めたものであった。当時この社会の主なる人をざっと挙げれば先ず指を三代目貞山に屈し、続いて桃川如燕、伊東燕尾、田辺南龍、松林伯圓、正流斎南窓、神田伯山、放牛舎桃林、邑井貞吉、小金井芦洲、伊東花楽、柴田南玉、宝井琴凌、桃川燕林、旭堂南慶、邑井吉瓶など、群星一時に雲集し、宛然八天下の観を呈した。

この言葉を受けて、小田光雄は所持している架蔵本に載せられている「大川屋出版目録」にも過半数の人々の名が見られることから、「確かに当時は講談落語の時代であったのだ」と述べている<sup>35)</sup>。

国会図書館にある九臯館発行「講談百種」等にも、関根黙庵が挙げている人たちの名前が見られる。示せば次の通りである。講演者は様々だが、いずれも速記者は今村次郎の講談速記本である。

・桃川如燕講演、今村次郎速記

『百猫傳内 小野川真実録』(講談百種 第一冊)、一八九三年六月

『寛永名士馬術誉』(講談百種 第四冊)、一八九三年七月

『小満源五兵衛 実説浪華五人斬』(講談百種 第十冊)、

一八九四年一月

・放牛舎桃林講演、今村次郎速記

『堀部安兵衛義勇傳』(講談百種 第二冊)、一八九三年六月

・邑井吉瓶講演、今村次郎速記

『忠孝常世物語』(講談百種 第五冊)、一八七三年八月

『松山麒麟一声』上・中・下編(講談百種 第七―九冊)、

一八九三年九月―二月

・松林伯圓講演、今村次郎速記

『列女お照の傳』(講談百種 第十一冊)、一八九四年二月

九臯館は主に講談本を扱う出版社であったことが伺える。そのため、明治二十年代ごろまでは活況であったが、大川屋A本の奥付と国会図書館の九臯館蔵書の最終時期から考えるに、その後の一八九七(明治三十)年代には廃業してしまっただろう。大川屋A本の奥付に見られるように、その後、印刷所が大川屋印刷所となり、印刷者、版權もろとも大川屋へ引き継がれたことが伺える。両者の奥付はそういった明治中頃の出版界の様子を表しているといえる。

また、本文冒頭の「序」の間にある見開き図版(11面)について述べると、大川屋A本の場合、本文中挿絵図版(12面)は本文と同じく茶褐色であるのに、本文冒頭の「序」の間にある見開き図版(11面)は白色の料紙であったため、後に貸本屋が表紙と共に付け加えられたものと推測した<sup>36)</sup>。

しかし、大川屋A本と九臯館本では料紙が異なる部分があり、「序」も「序」の間の見開き図版(11面)もこの九臯館本にも既に存在し

ている。大川屋A本と異なり、九阜館本は、「序」（九阜館本の場合  
は、「叙」の字）、「序」の間にある見開き図版（11面）のみではなく、  
本文中挿絵図版（12面）も白色の料紙である。九阜館本と大川屋A  
本の料紙の色をそれぞれ表すと、【表四】のようになる。

再度、料紙の違いから考察していくと次のことが分かる。大川屋  
A本にする際に、「序」と「序」の間の見開き図版（11面）は、その  
まま白色の料紙にしたのに対し、本文中挿絵図版（12面）は、本文  
と同じ粗雑な茶褐色の料紙に変更したようである。大川屋A本は一  
世を風靡した菊判講談本であり、後述するが、貸本屋向けの版型で  
あるため、印刷の煩雑さや値段を考慮した可能性がある。

【表四】料紙の色の比較（九阜館本と大川屋A本）

料紙の箇所	九阜館本	大川屋A本
「序」（叙）	白色	白色
「序」（叙）の間の図版（11面）	白色	白色
本文	茶褐色	茶褐色
本文中挿絵図版（12面）	白色	※茶褐色

九阜館本の十一面の図版も大川屋本と同じく、図版が並べられて  
いる順番は話の順番に合っていない。先に挙げた『松山麒麟一声』  
等の他の九阜館本を見てみても、「序」の間に挿絵が挟まれているこ  
とから、恐らくは、「序」と「序」の間の見開き図版（11面）は、九  
阜館で作成された際に、挿入されたものだろう。

さて、九阜館本と大川屋A、B本の三者についての関係性につい  
て見ていきたい。九阜館版から大川屋A本、B本へと続く一連の流  
れについて説明するのに、旭堂南陵の「続々・明治期大阪の演芸速  
記本基礎研究 大阪芸術大学博士論文 京坂（阪）における講談の  
歴史的検証とその周辺」<sup>37）</sup>が参考となるので紹介したい。

旭堂南陵によると、「二八九二（明治二十五）年代に入ると貸本屋  
向けに配慮がなされたのか、それまで四・六判と呼ばれるヨコ十二  
センチ、タテ十八センチ程の講談本が、菊判と呼ばれる現行のA5  
サイズに近い、ヨコ十五センチ、タテ二十二センチと大型化してく  
る。」<sup>38）</sup>と指摘している。

さらに、「二八九七（明治三十）年代になると急に菊判サイズが増  
加する」と言い、この現象について旭堂南陵は、「これは貸本業がさ  
かん（ママ）になるにつれ、ディスプレイ効果や盗難防止の観点か  
ら、着物のたもとやポケットに入れにくいように大型化したものと、  
論者は考えている」と推測している<sup>39）</sup>。続けて、「貸本業が盛んにな  
ると出版社もそうした要望に応えていかざるを得なくなつたので  
あろう」ことを述べている<sup>40）</sup>。

つまり、この説明に沿って一連の同じ本文を持った講談本『里見

八犬傳』を考えると、当初は四六判であったが、貸本業の盛んにより、大型化されて菊判本となり、後に文庫化の流れに乗って小型化したということであろう。そして、形は変わっても時流に乗り続けて、同本文は広く読み継がれてきたことが伺える。

浅岡邦雄によると、「明治期の読書・読者の動向をみてみると、当時の読書行動において、貸本屋における貸本の利用がかなりの比重を占めていたことが著名な学者や文学者などの日記・回想録などによつて知ることができる」と述べ<sup>(41)</sup>、その中でも「講談速記本が貸本の中心であったことは、東京などにおける学生を対象とした所謂『新式貸本屋』を除けば、全国的に同様の傾向にあった」という<sup>(42)</sup>。

また、菊判講談本が貸し手である貸本屋の都合により大型化したであろうことが考えられることに反比例するように、次の時代にあつては、恐らく、借り手である読者側の需要により、小型、軽量化が便宜され、文庫化されるという点は、出版文化史からみても興味深い点といえるであろう。それは次第に、明治年間を通して、ある程度の読書環境と読者層が形成されてきたことによる読書社会の発展の一例を表しているようでもある。

以前に拙論「布川文庫『駄出版圖書目録』——「八犬伝」受容の側面から——<sup>(43)</sup>」でも引用したが、小田光雄は「講談本と近世出版流通システム」の中で、当初『当世書生氣質』の第一号が「当時統々と創業された近代出版社のひとつ」であろう、晚青堂から一八八五（明治一八）年六月に発行されたものの、一八八七（明治二十）年には、晚青堂が紙型を手離し、共和堂か大川屋に出版権が移ったことを紹

介している<sup>(44)</sup>。

つまり、一八八七（明治二十）年頃にあつて、「近代書店はほとんど整備されておらず、誕生したばかりの近代文学も大川屋を取次とする貸本屋や絵草紙屋といった近世出版流通システムによつて読者と出会うしかなかった」のだという<sup>(45)</sup>。そして、「公式の出版には語られていないが、大川屋のような近世出版流通システムに基づく書店だけでない販売活動が、明治後半になって成立する読書社会の底辺を支えていたにちがいない。」ことを述べている<sup>(46)</sup>。

けれども、この大川屋の隆盛は続かなかつたようである。小田光雄は前出の「講談本と近世出版流通システム」の中で、「…近世出版流通システムによる講談本の全盛は明治後半であり、大正に入ると状況が変わっていたようだ。」と指摘<sup>(47)</sup>。その理由について、「貸本屋の衰退と講談社や博文館の参入に起因し、生産と流通と販売が近代出版流通システムに取って代わられたことに起因しているのではないだろうか。」と考察している<sup>(48)</sup>。続けて小田は「すでに昭和の初期において、講談本などの収集が散逸のために困難になっているという実態」について触れている<sup>(49)</sup>。

本稿で紹介している資料は、ここまで見てきたように、講談本隆盛の明治中期から後期の一時期の資料であつて、それは一書店である大川屋が講談本で一躍一世を風靡したことを窺い知ることが出来る、現在では忘れ去られてしまったらしい一時代を反映している貴重な資料である。

この三点の流れの中で、拙論【資料紹介】大川屋書店版『里見八

犬傳』略解題」で紹介した、貸本屋の文言「又貸ハ奈良の都の八重櫻ノ今日御覽した分〔分〕ハ〔ら〕魁 明日ハ御返し〔し〕ハ〔也〕魁」に抵抗の跡とも取れる鉛筆での線引きがあった<sup>(5)</sup>ことを再び顧みると感慨深く思われる。

それは「資料紹介」袖珍本『總南里見八犬傳』略解題」でも述べた通り<sup>(5)</sup>、享受面で考えてみた時、『里見八犬傳』においては話の長さが常に読者にとっては大きな問題であり、小型化されたことによつて、貸本屋による時間制限と、持ち運びの困難さがある程度解決されたといえる。袖珍本の扉には、元の所有者による、八犬士の名前の書き込みがあった。同本文を持ちながら、和装本から洋装本へと移り変わっていったことは、近代出版システムの台頭を表しているともいえる。

最後に、大川屋A本の原裝表紙について考察していきたい。A本は後に、貸本屋によつて表紙が付け替えられており【図版五】右、原表紙が不明であったが、ここまで考察してきた通り、A本は版型や本文中の挿絵の料紙以外は、九阜館本をそのまま使用している。ということは、表紙も九阜館本をそのまま使用した可能性が高いといえる【図版一】、【図版二】。

さらにA本を整備し、小型化した袖珍本のB本は、表紙は無地であり、本文挿絵もないが、口絵が一枚ある。その絵は、九阜館本と同じ絵ではないものの、同じ、大法師と幼い八犬士の構図である。原本で言えば、「八犬子髻歳白地藏之圖」である。菊判版のA本と九阜館本はほぼ同じであるといえるのに対し、袖珍版のB本にするに

あたつては、本文に句読点を振つたり、見開き図版を外したりと、幾つかわの変更点が施されているため、文庫化するに際し、一新するために、A本の表紙の絵と同じ構図で新たに描き直したものか、もしくは別の絵を口絵にしたのではないかと推測される。

## 五、おわりに

本稿では、これまで資料紹介として一点ごとに見てきた大川屋A本とB本に再度の焦点を当て、新たに入手した同本文を持つ九阜館本を加えて、可能な限りの同本文を持つ資料の版本調査を行った。

また、これまでの大川屋書店発行の「八犬伝」資料の研究を踏まえた上での考察を試みた。それによつて、これまで不明であった点について、幾つかの新しい事実や考察が可能となった。それは、大川屋書店や「八犬伝」受容史研究のみならず、当時の貸本や講談本研究及び出版文化研究の様相も垣間見ることが出来たことと思う。

しかし、数点の資料のみであつて、大川屋書店の『里見八犬傳』について未だ解明するには十分であるとは言えず、この数点の資料についても、十分に全てを考察、紹介出来たとは言えないが、それは別稿での課題としたい。今後も引き続き、大川屋書店の『里見八犬傳』について、可能な限りの資料収集、調査をして紹介していきたいと思う。

注 (1) 山本貴恵「資料紹介」大川屋書店版『里見八犬傳』略解題

『研究と資料』第六十九輯、研究と資料の会、二〇一三年七月、三九～四二頁

(2) 山本貴恵「資料紹介」袖珍本『楠里見八犬傳』略解題(『研究と資料』第七十九輯、研究と資料の会、二〇一八年七月、四三～四八頁)

(3) 前掲注(2)

(4) 山本貴恵「布川文庫『出版圖書目録』―「八犬伝」受容の側面から―」第八十輯、研究と資料の会、二〇一八年十二月、八三～九七頁)尚、布川文庫『出版圖書目録』は国会図書館の人文総合情報室所蔵の資料[VGI-H<sup>817</sup>]である。

(5) 吉沢英明「講談資料」―尋ね求めて三〇年』『日本古書通信』60巻5号、一九九五年五月、一一～一三頁)

(6) 小田光雄「講談本と近世出版流通システム」(『古本探求』、論創社、二〇〇九年二月、一二四～一三三頁)

その他、「出版・読書メモランダム 出版と近代出版文化史をめぐるブログ」にも幾つか大川屋書店に関する論考がある。

[<http://damitsuo.hatenablog.com/>]

(最終検索日:二〇一八年十月二七日)

(7) 八木敏夫編『全国出版物卸商業協同組合三十年の歩み』全国出版物卸商業協同組合、一九八一年六月、三七頁

(8) 前掲注(1)

(9) 前掲注(2)

(10) 前掲注(2)四七頁

(11) 前掲注(4)

(12) 前掲注(4)九一～九四頁

(13) 前掲注(1)四十～四二頁

(14) 前掲注(2)四五頁

(15) 前掲注(7)

(16) 前掲注(2)四五～四七頁

(17) 前掲注(1)四十頁

(18) 国立国会図書館デジタルコレクション「里見八犬伝」

[[dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/878474](http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/878474)]

(最終検索日:二〇一八年五月一日)

(19) 岡田温「旧上野図書館の収集方針とその蔵書」(国立国会図書館総務部教養課編『図書館研究シリーズ』No.5 一九六二年三月)

この他に、国立国会図書館ホームページにも記載がある。

リサーチ・ナビ 国立国会図書館

「国立国会図書館所蔵の内務省交付本」

[[https://nnavi.ndl.go.jp/research\\_guide/entry/home-honbun-100046.php](https://nnavi.ndl.go.jp/research_guide/entry/home-honbun-100046.php)] (最終検索日:二〇一八年五月一日)

(20) 前掲注(19)二〇二頁

(21) 前掲注(19)二〇二頁

(22) 桜井保之助「我國の納本制度について―その史的デッサンと問題の解説」(国立国会図書館総務部教養課編『図書館研究シリーズ』No.5 一九六二年三月、一二〇頁)

『ズ』No.5 一九六二年三月、一二〇頁)



- (23) 前掲注(4)
- (24) 前掲注(4) 八六～八七頁
- (25) 前掲注(2)
- (26) 前掲注(5)
- (27) 前掲注(5) 一二頁
- (28) 前掲注(5) 一二頁
- (29) 前掲注(5) 一二頁
- (30) 国立国会図書館デジタルコレクション「松山麒麟一声」上編  
[\[http://dl.ndl.go.jp/info:ndjp/uid:/P890797\]](http://dl.ndl.go.jp/info:ndjp/uid:/P890797)  
 (最終検索日：二〇一八年五月一日)
- (31) 浅岡邦雄「明治期貸本貸出台帳のなかの読者たち―鳥山町越雲  
 巳之次『貸本人名帳』をめぐって―」(日本出版学会出版教育研  
 究所編『日本出版史料―制度・実態・人― 4』日本エディタ  
 ースクール出版部、一九九九年三月)
- (32) 前掲注(31) 三五頁
- (33) 前掲注(31) 三六頁
- (34) 関根黙庵著、山本進校注『講談落語今昔譚』(東洋文庫 652、平  
 凡社、一九九九年四月、二三九～二四〇頁)
- (35) 前掲注(6) 二二八頁
- (36) 前掲注(1) 四十頁
- (37) 旭堂南陵「続々・明治期大阪の演芸速記本基礎研究 大阪芸術  
 大学博士論文 京坂(阪)における講談の歴史的検証とその周  
 辺」たる出版、二〇一一年五月

- (38) 前掲注(37) 一六三頁
- (39) 前掲注(37) 一八四頁
- (40) 前掲注(37) 一八四頁
- (41) 前掲注(31) 一頁
- (42) 前掲注(31) 三五頁
- (43) 前掲注(4)
- (44) 前掲注(6) 一三〇～一三二頁
- (45) 前掲注(6) 一三一頁
- (46) 前掲注(6) 一二九頁
- (47) 前掲注(6) 一三一頁
- (48) 前掲注(6) 一三一頁
- (49) 前掲注(6) 一三三頁
- (50) 前掲注(1) 四十四～四一頁
- (51) 前掲注(2) 四七頁

#### 付記

引用の際、ルビは適宜省略した。傍線、「…」(省略)、「」はす  
 べて引用者の補足による。「」は改行を表す。尚、引用の際にで  
 きる限り旧字体のまま引用した。

九阜館版『里見八犬傳』「特 13・256」(書庫内資料) 閲覧に際  
 して、国立国会図書館関西館の方々にお世話になりました。

この場を借りてお礼申し上げます。